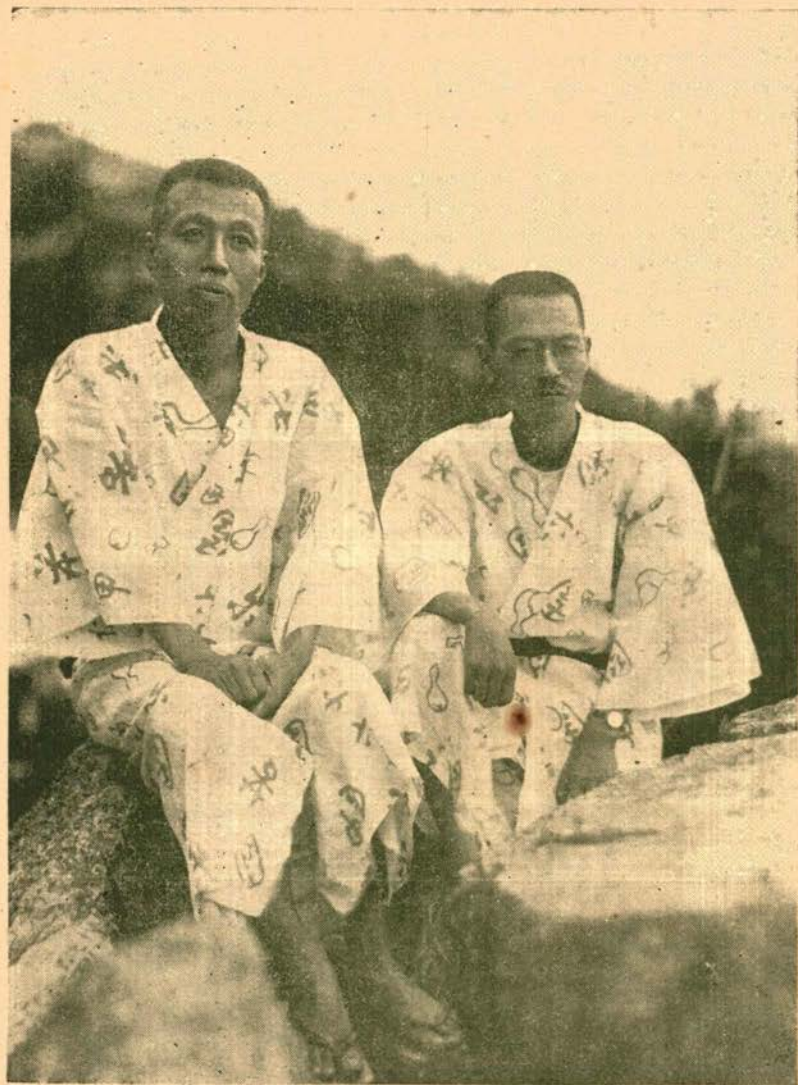


川柳雜誌

大正十三年三月三號
大正十四年十月一日發售
每月一回
每份一圓



川柳雜誌 第二卷第十號 十月號

本事川柳 (三) 武笠山椒 (二)

川柳と自然 路郎生 (一)

粒々集 蛭子省二 柴谷柴舟 (五)

劍花坊氏來る 松郎記 (三)

川柳書架 (五) (一八) 川柳家戶籍調へ (三)

玩具箱 蛭子省二 (三)

近作柳樽 麻生路郎選 (四)

祭立 淺井五葉選 (〇)

夏洗服 安川久流美選 (〇)

募集 高橋古城山選 (二)

逢狀 關本雅幽共選 (三)

漫畫 太田一聲 (三)

時代の産物 塚崎松郎 (五)

放馬居小集 柴谷柴舟 (八)

事務所偶會 (一六) 史風居小集 (一七)

字理許嫁と櫻咲く (下) (一九) 馬行居偶會 (一九)

川柳塔 啞人 松郎、刀三、輝翠、馬行、莢豆、かほる 柳路、万よし、葎乃、一洲、幸堂、一聲、二柳子 遅日莊主人 (二四)

柳珍堂忌 二柳子記 (四)

劍花坊、路郎兩先生(表紙) 苦樂園にて 莢豆撮影 編輯後記 馬行生 (〇)

句作上の常套語 麻生路郎 (七)

川柳雜誌

第二卷 第十號

川柳と自然

鳴尾へ移り住んでから既に四年の歳月を経た。最初の二年はさうしても自然になづまなかつた私が、後の二年の間に漸く自然に對する目がひらけて來た。君見給へ渡葎早が伸びてゐる」が生れたのは、それを證據立てゐる。ここが近來の私は自然に對する親しみがますます深くなつて行くやうである。そして夫れが決して川柳にならないものでないことを知つた。

私は毎日新淀川の鐵橋を阪神電車で渡るが、その時は必ず本から眼を離して大自然に接する。自然は毎日のやうに私の眼に新らしく映つて來る。決して同じものは映らない。川柳家が川柳は都會詩であるなき獨斷的にきめてかゝることの危険さを想ひ微笑を禁ずることが出来なかつた。川柳は人事詩であると同時に又叙景詩であることも忘れてはならない。(九月二十日路郎生)



本事川柳 (三)

武笠山椒

(四一) 的例は五大力だミ酒井いひ

酒井は松平外記の監督長官たる西丸御書院番頭 酒井山城守、

五大力は御承知の『五大力戀絨』

(四二) 山城の宇治のこまりミ茶にされる

山城は、外記の監督官長たる西丸御書院番頭 酒井山城守の事

であらうが、宇治のこまりがわからぬ。

(四三) 生育の側にひよろりミ六郎右衛門

大久保六郎右衛門は西丸御書院番頭で現場を見分した人である。

六郎右衛門をろくろ首にかけて生育に取台はせた句作。

(四四) 御帳かき天窓をもかき辱もかき

此の御帳かきは誰の事が分らぬ。

(四五) 逃げたのは拙者ミ貴殿でなし

(四六) 其の時になぜ抱留めはなされぬぞ

(四七) 四番組立草臥れて蚊に喰はれ

四番組は外記の組の人々 外記を出すまい襖をおさへた儘、

久しく立つてるたのを嘲つたのであらう。

(四八) 他組まで相番突合がなはり

外記の一件に見懲りして 新参をいぢのズ者が無くなつた、

こいふのであらう。

○ (四九) 死骸をも見ずに一十日一夜泣き

檢使の手おくれ。

○ (五〇) 二十三夜待所じやないといひ

四月二十二日の出来事だから、翌晩が二十三夜待。

○ (五一) 亂心にしろこはむごい御崩き

○ (五二) 死人に口ありて跡目の願なり

○ (五三) 評定も小田原町でむづかしい

小田原評定。小田原町とは、本多伊織の宿所が築地小田原町であらのを言つたものか。

○ (五四) 赤坂のこしやは糺を遅く賣り

外記の宿所は赤坂氷川臺。檢使の手おくれで死骸の引取がおくれたから。

○ (五五) よく聞けば鼠三駒の意恨なり

安西伊賀之助の申渡書に、其方儀狩場追鳥狩之節席下の松平外記義拍子木役に相成候を心能く存せず。同人室へ寄合の節外記心障候義々申鼠山稽古之節も彼是甲嘲り。○候挨拶に及び候云々。とある。此の狩場が駒場であつた事は、當時の落

首松盡しの文句に「六ツむかしは駒場野で追鳥狩や下馬の松」
とあるのでわかる。

○ (五六) 拍子木のうつつてかはつて皆殺し

拍子木は前條にある拍子木役の縁で、うつつての序詞に置いたもの。

○ (五七) 外記りんみいふのは腹を立つた事

○ (五八) 牛若の二百分一の手利なり

牛若は千人切。外記は五人切。

○ (五九) 甲子にさきおミ、ひの咄し出し

四月二十二日は辛酉であつたから、廿五日の甲子からは一昨々日に當る。

○ (六〇) 先格に佐野の咄も引出され

天明四年三月廿四日、佐野善左衛門といふ旗本が、當時權勢隆々たる若年寄田沼山城守を殿中で斬つて、世に世直し大明神と論はれたのは有名な咄である。

此次にもう二句あるけれど、下がかつて居るから省く。

天理教ダンサー程の藝を持ち 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

同窓會みんな賢い事を言ひ 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

鬼ごっこ櫛を落して鬼になり 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

迷ひ犬おんなし道をまた戻り 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

刑務所の塀を終れば芋畑 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

電話室母仰向いたまゝで濟み 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

隣まで行くにも走る女の子 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

下宿でもしてみよ云ふも親の慈悲 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

湯上りを着るも母親何もせず 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

金魚鉢水を仕替へて廣く見る 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

若旦那習間椰楡ふまでになり 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

水屋から算盤を出す四疊半 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

待ち合はす筈の所で母に逢ひ 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

これしきの事も氣になるなさぬ仲 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

獨身の又自動車で行くよ云ひ 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

しばらくをラムネの泡の上るこも 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

其世辭を亭主が云へば事もなし 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

其飛車を遣れまはたから智慧をつけ 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

相談をするには兄の堅過ぎる 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

後難を怖れなにかを包み 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

落雷のあつた立木を高く見る 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

旅の留守朝顔塀を越して咲き 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

鶏が今捕まへられたらしい聲 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

係長停年近くなつて病み 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

若者よ何故説教を嘲笑ふ 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

葛蒲湯につかつて力こぶ出してみる 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

そろばんを置かされてゐる御常連 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

くつろいだ氣持で女膝を立て 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

ブランコの四邊くほんだ水溜り 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

現金を持つての方が勝を占め 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

暖簾ざる頃には娘氣をゆるし 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

實直な親を泣かせる程になり 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

汗を拭く事も仕事の一つなり 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

反古の中から融通をした親ご知り 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

獨り者共同腔でうけがよし 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

賑やかな方へ迷子探される 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

手紙にはうれしいうに書いてあり 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

差引がちよ心算まは違ふなり 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

有ませぬ金を兄貴に使はれる 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

叱られて居ても支那人賣るつもり 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

怒つてるやうにも見える鯛賣り 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

出水は蛙に難波橋を見せ 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

工面した金を黙つて握らせる 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

交換手よ云ふ聲妹氣にしる 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

一狂

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同



句作上の常套語

(四)

麻生路郎

(6) 「さ」で止めた句

武市川の句を讀んでゐるに「俯向くは言ひ譯よりも美しき」
と云つたやうに、一句の終りを「さ」で止めた句はかなりある
が「御短慮のお袖にすがら美しさ」の如く「さ」で止めた句は
殆んど見當らぬと云つてもよい位に少い。しかし柳樽の句を讀
んでゐるに、この「さ」止めの句がかなり澤山あることに氣づ
く。

それでは現代の句ではどうか云へば、古句の模倣時代であ
つた明治の句にはこの叙法の句が相當に散見するが大正に入つ
てからは著しく減少したやうに思ふ。

大體「さ」止めの句は、齒切れがよくて、いゝ響きを與へる
のが特色であるが、一面から見れば、斷定的なところがあつて

餘程びつたり來ない限りは、嫌に説明的で失敗に陥り易いやう
に思ふ。

これは僅々十七音字であらはず短詩型の川柳で「美しさ」「
面白さ」の如く五音字までを説明的の文字で奪つてしまふから
佳句を獲るのに困難なのであらう。

しかし、古句の中にある「さ」止めの句必ずしも拙すい句ば
かりでないことは勿論である。現代の句に於てもさうだ云へ
る。

——昔の句——

花嫌のぶするで無いのに、くらしいさ

(評)これは柳樽の初篇にある句である。花嫌さ云へば「當分は嫁逃げ
込むにかかつてゐ」であるかと思へば粹も粹、あまりにさりなしの
巧みさにくらしく思ふその意である。之も徳川時代の家庭さか

花嫁さかいふものを知つた人でなければ充分にこの句の味は解らない。斷髪で搦手でもしやうかさいふ現代では全く隔世の感がある。右の句を讀めば花嫁の前身が泥水稼業であつたこと位は説明するまでもなからう。

すつほんに拜まれた夜のあたたかさ

(評) すつほんは恩怨の深い動物とされてゐる。首を伸ばしてゐることを料理人が鋭利な刃物ですかつて殺るのださうである。その時に料理人の咽喉笛目がけて飛びついたさいふ話さへある。この句の場合には料理をなすため刃物をふりがざした時、その首をさしのべてゐるさまが、いかにも憐れみを乞ふやうな態に見へたのである。それを拜まれたと詞に綾をつけたのだ。しかし勿論すつほんは殺された。すつほんは非常に精力を増すものであるから拜まれた夜のあたたかさ云つたのである。

だんぐくにそんならの出る面白さ

(評) 長唄の一つもうたへ、淨瑠璃の一段も唸なれやうさいふ連中から集會は賑やかになつて来る。はにかみやや無藝先生は、お次ぎの番だよに、そのかされて、そんなら立ち上るのもあれば、諺の一つもうたつてせめをふさぐ、今なれば、枯れすきやデカシヨでもやらうさいふ騒ぎ、光景隨如たるものがあるではないか。なんでもなく詠んでゐながら何處かに巧みさがあると思ふ。

ぬかみそへ思ひ切る手のうつくしさ

(評) 新世帯の句である。ぬかみそさいふものは若い美しい女から見れば、それは汚らしいものであるが、遂ひに思ひ切つて家庭の女さなつたことを詠んだのである。

仲人のあまから出来るおもしろさ

(評) 何屋の息子と何屋の娘、すいてすかれた仲ださいふこを薄々知つた双方の親、どうせどつかへもらつていたどかればならぬ娘。

どうせ、どつかから嫁をさらればならぬ息子、いつそのことに添はせてもやらうが、ごれ合ひの夫婦だと云はれては片身か狭からう。第一店の腰簾にもかかる。そこで心安い何屋の何兵衛さんにも仲人を頼まうぢやないかさいふ寸法、これは今も昔も例には乏しくなからう。人世を樂觀したところ此の句の味がある。

妹のさきへかたづく氣の毒さ

(評) 姉の病身か、不纏綴か。まよにならぬのが浮世の常か。同じ姉妹に生れても人生の行路は雨か風か一寸先は闇に違ひない。

— 今 の 句 —

言ひ出してしまへは戀のあつけなさ	花菱
母からの手紙が届くこの寒さ	古城山
あはれさは崩れるやうな美しさ	刀三
杉の蔭暗うなつてる有難さ	雅幽
筈の土も日本のなつかしさ	柳也
人間に忘れられたる日の強さ	柘果
泣いてゐるうちがお前の極樂さ	狂水
押賣に亭主が戻る氣の毒さ	零骨
ほり込んで喰ひつく迄の氣の長さ	小人
たまくに拂ふて廻るころよさ	莢豆
吹流し程棒飛の鮮かさ	東魚
兄はまだ丸刈で居る頼りなさ	秀哉

(7) 「來」で止めた句

「大三十日すかさず王手／＼來た」ではなんだか散文のやうで締めく／＼がない。

そこで古句では「大三十日すかさず王手／＼來」にして一句の調子を整へてゐる。斯うした叙法は川柳獨自のものかも知れない。これは必ずしも「來」に限らず「物さして足らぬ／＼きた／＼いて居」の「居」もさうである。「四五兩ですめばお袋請けだす氣」の「氣」もさうである。「田樂を持つて馬かたしかりに出」の「出」も矢張りさうである。「箸おくかおかぬに息子ついで出る」は何處までも「出る」であつて「出」ではない。この例によつて大いに考ふべきである。

右に述べたと同様の手法に據つて幾らでも應用が出来るのであるが下手に使へば變な調子の句になつて句の價值を傷ける場合が少くない。

昔の句

去狀のあミへ紺屋が 出かいて來

(評)古句を一瞥するに、この「來」で終つた句は實に僅少である。この句は女房がかれて注文してあつた品が、去り狀をやつたあミに出來あかつて來たさいふ意味である。紺屋さいふものは、さう期日通りに仕事を運ばない。つひのびく／＼にしてゐる間に片方では夫婦別れて去り狀を出したあミであつたさいふのである。未練のある夫であつたさいふが出來あがつて來た女房の注文品にも、さびしささなつかしささを感じたことであらう。約束を違へぬ紺屋

あはれなり」さいふ句のあるのを見て昔の紺屋が、どんな状態であつたかが知れやう。

大三十日すかさず王手／＼來

(評)將棋をさして王手／＼攻めたてられるのは苦しいものである。どんな犠牲を拂つても王將は逃げのびねばならぬのだ。一年の結末は、今までに繰りのべて來たすべてのものの拂ひ月である。總勘定の日は大三十日の一日にかかつてゐる。酒屋も來やう、米居も來やう、八百屋も來やう。「からめ手は女房の防ぐ大三十日」さいふ日である。生活苦の悪戦苦闘振りな將棋の言葉を借りてかくは言つたのである。

今の句

ひつそりこしたこ 且那みつけて來

待つて待つてゐるのへ飯をすませて來

病室へ機械の音がせまつて來

喧嘩する程に世帯が締つて來

冷やかな父が家出を迎ひに來

我が家のやうにめしやへ戻つて來

手紙書く間もないのかさ叱つて來

舞妓もう謎かけるこさ覺へて來

二次會の一人は寒く炬燵へ來

順調に行かなくなつて訪ねて來

野袴で文樂からの使ひが來

襦衣一枚出來ぬ暮しをつづけて來

少し輪をかけて貧乏知らして來

「來」で止めた句は古句より現代の句の方に多い。句に於ても遙に古句を凌いでゐるのは愉快である。(つゞく)

劍花坊氏來る

六甲 苦樂園小集
大阪 廣田家歡迎宴

九月十五日夜柳界の先進、井上劍花坊氏、大連よりの歸途本社に立寄られた。

同夜は本社一泊、翌十六日主幹路郎氏の案内で六甲苦樂園大觀樓へ、其の夜は珍客劍花坊氏、主幹路郎氏の外に、同人二柳子、莢豆、刀三の諸氏と共に親しく句箋を手にした。

逃 腰 劍 花 坊 選

逃腰は煙草ばかりを吸ふてゐる 二柳子
逃腰は逃腰ひよんな事になり 莢豆
逃腰へ強く叩いたせり賣り屋 松郎
逃腰に使者を闕に手をつかぬ 刀三
盃の借をすまして座を下り 同
逃腰は子供が腹に動く頃 同
若旦那念を押されて困るなり 路郎
つりの多いこゝに氣付か歩きふり 同
逃腰で弾く三味線の唄もなし 同

影 互 選

影鬼は體を曲けて逃げ延びる 劍花坊
影の延びて來るのを知らぬ立話 二柳子
油をさせば影眞つ黒になり 莢豆
院長の影院長を向ひ合ひ 松郎
狂人の自分の影を罵れり 同
内職の影に恙のない寢息 刀三

我が影の届く所に水溜 同
貧しさの影が動いて飯がすみ 同
うらゝかさ影がきりく舞はれ 路郎
大きなものにその影さへも奪はれ 同
その影へ涙しつゝこり落ちて。 同

十七日夜、すが／＼しい初秋の天王寺安井天神ト料亭廣田家に於て、劍花坊氏歡迎會を催す。席上、參會者中の未見の人達は、劍花坊氏の偉大なる體軀大聲によつ豫想を裏切られた。膳部が運ば

れた後、主幹路郎氏により當夜の簡單なる一場の挨拶があり、次いで劍花坊氏は起つて答辭を述べらる續いて、川柳の起源より現代の川柳に至る経路、並にそれに伴ふ傳統革新についての氏一流の有益な講演があつた。それより席題「浮氣者」兼題「一心」の發表があつて宴酣、となり一同順次自己紹介に移り、一起一坐に次ぐ拍手に折柄の雨を忘れ勝りに無事歡迎會は終つた。當夜の參會者は左の諸氏。

(松郎記)

劍花坊、路郎、水府、溪花坊、蚊象、茶山人、文錢、長人、悟郎、乾坤、ひろし、美麿、凡平、炭車、柳水、番翁、春峰、琴月、二柳子、啞人、芦磯、松雨、萬よし、放馬、かほる、馬行、刀三、松郎

浮 氣 者 路 郎 選

腰帶の赤が目立つ浮氣者 炭車
戻らなら許してやるさ、亭主 柳水
浮氣者さつぱり返事だけはする 放馬
浮氣者自分へだけは眞に惚れ 萬よし
浮氣者オールバックにして戻り 凡平

浮氣者身綺麗にして金を持ち かほる

浮氣者今夜は別の氣で出掛け 悟郎

浮氣者結局若い方に行き 芦穂

夜晝の區別嫌がる浮氣者 馬行

浮氣者も思はず他所で日を過す 溪花坊

逃げ道を心得てゐる浮氣者 乾坤

薄情な事は知つてゐる浮氣者 同

氣の毒な位ひですます浮氣者 刀三

浮氣者金の切れ目を待つてゐる 同

自分でも浮氣と氣付く若さなり 啞人

寢返つて女房のこみがふき浮び 同

浮氣者今日信心に坐らされ 松郎

浮氣者それ見た事か雨に逢ひ 同

此一座みんな浮氣にしてしまひ 水府

肩の荷をおろし浮氣になりすま 同

(軸)浮氣者このころ夢の多い路郎

心 (兼題) 劍花坊選

いゝ身褻女房辻まで出て教へ 柳水

別々の心で上がる段梯子 凡平

眼を閉じてじつと心の奥を見る 琴月

無造作に出され遠慮する心 乾坤

お互ひに心をさぐり合つて泣き 春三

心にもあらず浮世の波を行き 文錢

ほんまの心裏切りするつもり 長人

唯笑ふばかりで心掴ませず 刀三

傷ついた心と瘦せた父なし兒 馬行

女には遊びの内は勝もする 蚊象

曲線美から衝動をうける宵 溪花坊

血走つた眼を女房は見送さず 松郎

さうしては居られぬ筈をひざ枕 同

五 客

そつと見るものに心を咎められ 乾坤

淋しさは心の底の底になり 文錢

ましまらぬ心に明けが近くなり 啞人

嘘ついて軽い心になつてゐる 溪花坊

出世なきもう問題にしてはるす 路郎

(人)馬車もゆれ二人の心もゆれ ひろし

(地)吹き出た煙草の煙の先 蚊象

(天)さびしさをもためて 里へゆき 路郎

(軸)思ふ事がさうしてもまごす 劍花坊

當夜劍花坊氏は本社に一泊された。翌

十八日の朝、本社で路郎氏と二柳子と三

人で一酌を催された後、劍花坊氏は正午

十二時三十分大阪驛發の列車で名古屋へ

向けて立たれた。主幹路郎氏と二人二柳

子氏がプラットまで見送られた。

觀心寺吟行

吟行のシーズンに入りました。来る十月四日(第一日曜日)に長野の觀心寺附近へ吟行を試みるこゝになりました。碧い空を眺めて句作に耽けるお互ひ川柳家の幸福を妄想はすにはゐられません。輕装で参加して下さい。集合場所は南海電車の難波驛

です。朝十時までに來て下さい雨天のせつは中止いたします。揭示板を必ず見て下さい。會費といふてあつめませぬ故各自辨當持參、電車(片道五十六錢)の切符も各自でお求め下さい。兼題「坊主持」三句(路郎選)萬障を縁合して御參會願ひます。

玩具箱

省 二 生

(八) 道 祖 神

「未、插花」や「柳の葉末」に道祖神の句を見出さないのを不思議とする。

村の嫁道陸神に箔をかけ

撮む程道陸神に箔ををき

自分が川柳をやり出した最初知つた句である事に興味をもつ。道祖神は音讀の上から道陸神道縁神なご書かれてゐる。神體は普通自然石の圓いもの、或は人工的の枉石に名を刻したものの、もこ岐神饗神と等しく獨神で、旅立ち首途に饗けする支那の神と混じり、後に性殖器神化して男根を祀り、和訓栞には男根を奉納するとある。凡そ男性は兩部を兼ね、思想の表現上當然に發達し夫れにつれ女性も現はれ、源平盛衰記に笠島道祖神は女であると稱して居る。甲子夜話に備後國今津

宿のはすれ田中に石の群轉す、その中に二大石ありて相對す形男根と女陰の如し又二石の傍に紙の小旗多し其故を問ふに、男女陰虛に病ある者祈りて驗あれば此の旗を立つとあるから併立の神も非常に多かつた。今昔物語には面白い話が載せてある。

日本性殖器崇拜略說中二體並立道祖神の項を處々抜記してみる。

「甲斐北巨摩郡白須村、信濃諏訪郡下葛木及宮川村、飛騨吉城郡宮川の沿岸なる鹿間茂住の金龍寺及横山等其他所々にて石に刻せる男女二神併立の道祖神」見たり、又男女二神握手せるは信濃諏訪郡茅野の村端、飛騨宮川沿岸の小祠内等に存在し、松本市近傍崎崎村鹽竈社の前なるは男女並立ち互に片手を握り合ひ、女神

は右手に銚子、男神は左手に盃を持つ松本より南梓川沿岸のは多くは男神は女神の肩を擁し……鳥取縣西伯郡一圓にて祀る幸之神は男女兩體衣冠して坐せり、佛教と道祖神の結合せしものは、伊豆伊東町のは三躰にて中央は合掌するもの、其右には兩手に笏をもつ男體のもの、其左には寶珠を捧ぐる女躰のものなり、全町を通じて四十三躰の多きを數ふ。正月四日の祭禮には道祖大明神の大幟を立て道祖神の文字ある紅燈を掲ぐ。

(九) 櫻 の 花

花は櫻にあらさず、又櫻にあらざるにもあらさずは、連句上の一つの約束となつて居る。芭蕉も櫻の花の事は細川女官法師の正傳である、櫻が一木である折りには咲く開く苦むさ云へば花になる態度を示して、去來の「絲櫻腹一ぱいに咲きにけり」を故實に叶つたものだとして居る櫻と言へば花枝幹を眺めてゐる。花と言へば櫻の花のみを見つめる心理である。

夫れ程櫻は花にのみ人の心をひきつけるので、他の花には此の力が無い。「花の山いづそ殺せの三下り」さうして、レットル櫻正宗の良否を吟味する暇があらうか。香化あれば好しである。霞の奥を問ふをやめよ見ゆる限りが櫻花であるのが面目だ。梅なら亭が欲しい、藤なら反り橋が欲しい。

花の山ごせ松の木の方へむき

自分は此の句を誦する度に同情に堪へない。花の山に松の木の交るを恨む。ごせも俱に花に對して興と同じふし得ないではないか。いけ花は自然のままを移すのであるから生花じあり活花である。櫻は日本の花王と稱す故に我朝に於て花といへば櫻に限るなり。又種類多し雖も櫻さばかり號するは一重櫻に限る。之れに因て殊更に一重櫻を尊び習ふなり。挿花は優美にして風曲あり枝のうつり廻らに奥ふかく挿込み。濃艶燎爛として席中に充滿たる風情を賞す。掛花置花ともに間厚く生くべし。勿論餘花を交ゆる事ゆめゆめあるべからず、三芳野の峰初瀬の

谷間をのぞび「さ」櫻は散らぬ花をわさこ二三輪水に浮せ置く事あり、もつこ櫻に限りてほかの花をさりませるを禁ず、同じ櫻は二色三色までは苦しからずされど好みて生くべき花にあらず、世々の故人言ひ傳ふさなり」
古は茶席に櫻を挿す事が禁じてあつた即ち一枝二枝を賞すべき花でない。我國第一の花であつても見劣りするを恐れたからである。

十淡島様

淡島神社或は粟島神社とも書く。處々に祭らる。丹羽南桑出郡篠村粟島神社、磐城石城郡窪田村字勿來粟島大明神、越後高田市在淡島神社、紀伊海草郡加太町淡島神社からは女夫羅の御守が出る。略縁起に「抑も守羅は神功皇后三韓を征伐し給ひ御凱旋の折から、此淡島に到らせ給ひ少彦名命、御容いさ小にましましてれば小さき御容をきぬにて作りて神殿に納め玉ひ、其後仁徳天皇淡島に遠狩し玉ひて皇后の御容を紙にて作り此社頭に納め玉ひてより淡島雖又は小米羅とも言ひて

身の守りせり。此守護を常に懐中なす人は武運長久海上安全、腰より下の病に苦しむ事なし。淡島櫻は下の病に効驗ありこ知ればよい。晒木綿の小さき湯文字や製して奉るさか、小切にて三角の屠蘇袋や猿なまきを作つて奉納する一兩お針の上達を祈り針供養なごもやる。

淡島の官軍あはしまへ流罪なり

屠蘇の鈴生りあはしまの御宮居

猿の綿抜いて淡島着物にし

齋藤氏曰く、盛岡市内松尾下の淡島神社を尋ねてみた。堂は一間四面許り今は個人

の屋敷内に在る丈けに整理は相應に行

届いて居る。額等には普通粟島さかいて

る。縁結びの神で女性のものを表徴し

たさ云ふ穴の徹つた自然の小石に麻糸等

が貫かされて格子戸にゆはへられて居た

格子の内には古い片輪羅が澤山納められ

てあつた。本尊や縁起に就ては屋敷主の

若主人は知らなかつた。余等の見た本尊

さ思はれるものは自然の形の双對的小石

で女の方は牡丹若の両面が剝落して丁度

女〇の形に變つたもの双方三寸大のもの

に過ぎなかつた。

柳珍堂忌

九月六日夜
於築港託兒所

大正八年九月十四日に亡、なりました柳界の鬼才松村柳珍堂を偲ぶため一夕の句會を催しました。當夜主幹から「柳珍堂に就て」といふお話がありました。(二柳子記)

路那、松耶、刀三、嶺月、義矢滿、欣通子、秀哉、一路、虻蜂、萬よし、飯山、ひろし、乾坤、塊佛、柳水、泊水、山月、蚊十、かほろ、突支坊、閑路、凡平、しげる、炭車、のぼろ、青影子、三笑、光太樓、孤月、輝翠、馬行、二柳子(名簿より)

名 人 互 選

名人は人氣の程も唄はれず	山月	名工の大方出來て氣に入らず	義矢滿
名人云ふも評判だけの事	嶺月	名人の夜更かし母が看せ掛ける	同
名人の眼にも此世はせらからし	炭車	名人の女房寂しい日を送り	塊佛
名人試合は睨み合つてすみ	一路	名人のまだ寝ぬ咳が聞わて來	同
何時來、名人飲んでばかり居り	凡平	名人は片目をふさぐ癖があり	かほろ
會心の作名人は惜く賣り	柳水	名人は一人娘に先立たれ	同
名人にきくこ僕らはまだ若い	馬行	夕焼けを見る名人のわび住居	しげる
教へても呉れず名人笑ふのみ	乾坤	名人の眼にうつる蜘蛛の巢	同
けつたいいなこへ名人一つ打ち	のぼろ	頼まれてからの名人呑み續け	青影子
文字一つ書けず名人將棋なり	ひろし	名人の作へ白蟻たはむれる	同
名人にめつたな事は聞くまいぞ	輝翠	風が出た事も名人知らぬなり	秀哉

名人に今日一日の飯はあり同
 名人云知らず花魁惚れるなり松耶
 何思ふたのか名人がばこ起き同
 名人にお世辭を言ふて叱られる刀三
 名人かたまに笑つて驚かせ同
 立替へたこ名人は忘れて居飯山
 借金のを額を名人きいたゞけ同
 名人は顔をあげずに返辭する路那
 名人にのませる酒を買ひに出る同

洋 食 屋 馬 行 選

ビフネキの煙に亭主の眼が醒。刀三
 洋食屋トマト三四つ仕入れて來。義矢滿
 洋食屋近所へソース匂はせる。秀哉
 洋食屋主人は豚のやうに肥ね。三笑
 洋食屋品目ほごに出來ぬなり。柳水
 洋食にきまり不服な國の母。乾坤
 洋食屋近所へすまぬやうに起き。光太樓
 看板で二階が、暗い洋食屋。閑路
 洋食屋スベルの異ふ字をならべ。ひろし
 切戸から出て來てひまな洋食屋。松耶
 洋食屋こゝらの人云見受けたり。同

洋食屋掃除に廣い土間を見せ 飯山
 酔ふたのが椅子向替へる洋食屋 同
 洋食屋リンゴの山が一つ 減り しける
 洋食屋ハツ手は朝の陽を受けて 同
 すりつばに想ひを乗せて洋食屋 路郎
 君僕のりんご隔した洋食屋 同
 トランプのやうに並んだ洋食屋 同
 (軸)洋食屋派手な粗相に暮れ 馬行
 忙しさコックは帽子氣にかける 同
 毒 藥 輝 翠 選
 死ぬ云ふ奴に毒藥つきつける 孤月
 藥局は毒藥だけを赤く書き ひろし
 猫いらすずす静かに警察醫 塊佛
 毒藥を飲んでるやうな茶碗酒 聞路
 毒藥を手にしつかりと死んで 蚊十
 毒藥の只一滴のきゝめなり のほろ
 此中へ毒藥入れる智慧を出し 青影子
 毒藥の自殺へ検死ひまをいれ 凡平
 毒藥を盛る夜さこかで鶏が鳴き 飯山
 毒藥を派出に女が先に飲み 高よし
 覺悟してゐるのに毒の手がふ 光太樓
 大望の眼に毒藥のよく廻り 乾坤

毒藥を飲んで書置讀み返し しける
 毒藥を今は笑つてみるものゝ馬行
 毒藥を飲まして毒婦ほつこする 一路
 毒藥でなかつて喜劇落ちになり 同
 毒藥のこんな少しも侮ざらせ 秀哉
 毒藥を服ます間際に邪魔が出る 同
 毒藥を飲んで効くまで眼をつ 義矢滿
 かげがへのない毒藥を盛り損ね 同
 毒藥のありかを留守の間に換へ 刀三
 毒藥の瓶は不氣味に曇つてる 同
 毒藥が机の隅の暗さなり 路郎
 猫入らず外にりんきの手を知 同
 (軸)斷念をして毒藥に手が届き 輝翠
 藏 (兼題) 松郎選
 遠くからお城のやうに見ゆる 嶺月
 見下した藏は半分木に隠れ しける
 藏へ来て母先代のことも言ひ 萬よし
 賣出しにちつほけな情藏へかけ 孤月
 藏の戸へお染油を塗つておき 塊佛
 藏と藏との間から細い風 突支坊
 往來か藏から見わけて面白く かほる
 藏ほごの家で果てたる三代目 柳水
 大騒ぎの中へ藏から起きて來る 同

藏の中丁稚ミ丁稚もめてゐる 蚊十
 そんな聲出すなと叱る藏の中 同
 抵當に入つた藏を高う見る 一路
 あの藏だけが秘密を守るやう 同
 責任は一々藏を閉めに來る 輝翠
 つんじした嫁の母家は七戸前 同
 偽せ物ミ知らずに藏へ飾り立て 秀哉
 藏の洩り其儘他人の手に渡り 同
 黄昏るゝ村に藏だけ残される 乾坤
 鳴き聲に藏へ忘れた猫を知り 同
 住
 出しに來た物を忘れる藏の中 三笑
 米高をよそに米藏つまつて居 突支坊
 藏番へ時間間際の荷が届き 凡平
 藏の用心籠の底を見せ かほる
 藏の用初戀今日も言ひそびれ 義矢滿
 籍入れてからの養子に藏を見せ 刀三
 一筋に曳船の着く河岸の藏 莢豆
 手拭屋顔を上げるミ藏の壁 馬行
 やがて藏の建つころ父の胃瘤 路郎
 (人)藏付の借家にしても聞き 柳水
 (地)夜廻り藏の方へ鳴らして來 蛇蜂
 (天)藏へ来て後家立て通す決め 路郎
 (軸)藏のあいにく秋深い庭 松郎

放馬居小集

八月 七日夜

泊り客

泊り客何處か見たいこ腹できめ 一角
 泊り客工場の笛さ知らぬなり 二柳子
 水道をきつちりしめる泊り客 飯山
 泊り客かんぬきはめた音をきゝ 同
 湯上りを鞆の傍へ泊り客 放馬
 泊り客今日は蛙を聞かず寝る 同
 レコードを替へ氣に入る泊り客 輝翠
 飼犬が馴れた頃去ぬ泊り客 同
 驚いたやうに目醒る泊り客 乾坤
 泊り客母長持へ用が出来 同
 泊り客兄の名前を間違へる 松郎
 泊り客脱いだ羽織へめつさうな 同
 泊り客態に家賃にびつくりし 萬よし
 三日目は泊り客だけ遊びに出 同
 漬物をほめてみるのも泊り客 刀三
 泊り客寝間着の皺を伸してみ 同
 それもなく娘を泊り客に見せ 路郎
 泊り客雨で枕をあてがはれ 同

貰ひ子

貰ひ子のやうく乳を離れたり 放馬
 良い暮し貰ひ子實子らしく見え 萬よし
 貰ひ子さ知つた日からを落付 乾坤
 貰ひ子を二人であやす當座なり 二柳子
 貰ひ子のやせてゐるのは目立 同
 貰ひ子はすゝめるまゝ嫁を持ち 飯山
 もう菓を打つ程貰ひ子は育ち 同
 貰ひ子をして宿替への日がき 輝翠
 貰ひ子へ無理な晴着が一つ出来 同
 孝行をして貰ひ子は涙ぐみ 刀三
 貰ひ子へ唯美しい御両親 同
 貰ひ子のまめくしさを淋し 同
 貰ひ子の今日も梳十へなつく 松郎
 お歸りさいふ貰ひ子の聲が澄み 同
 貰ひ子へ一反持つてかゝるなり 同
 貰ひ子の方が藝者になるさいふ 路郎
 貰はれたまゝの坊ン稚で育て居 同
 貰ひ子は嫁を自分で見つける氣 同
 金のない事を貰ひ子知り初め 同

信心

習慣にあらず夕日を拜んでる 萬よし
 もたないこで信心三昧を 飯山
 信心にケールカーは素つ氣 輝翠
 信心をすゝめられてる病上り 同
 信心を思つた嫁の不届さ 乾坤
 佛壇へ母信心を光らせる 同
 避暑の人信心の人まじる寺 二柳子
 信心の方から見れば近い道 同
 母親のつまづくやうなお念佛 路郎
 信心で来たのへ櫻眞つ盛り 同
 信心をけるり忘れ嫁のこも 同
 嘘ついた罪を信心拜んでる 刀三
 信心へ勝手悪い家が建ち 同
 信心の軒に光るもビール瓶 同
 放蕩の留守を信心するばかり 松郎
 後ろから信心呼ばれそに思ひ 同
 信心の無言で越へた水だまり 同
 信心の話息子は横になり 同
 繪馬上けての信心氣が滅入り 放馬
 信心はしてるか酒は断つてゐず 同
 信心へ又本山が焼けた記事 同
 信心がゐる寫真班邪魔になり 同

史風居小集

八月廿五日 夜

舅 悠々選

停電の中に舅の咳一つ 十字路
 頼母子の幹事もしてる舅なり 聞路
 夜店から舅風味を貰て来る 松郎
 舅のための新聞を一つこり 路郎
 涼み臺舅がいつち後に 馬行
 姑が舅のたちをはがゆがり 同
 江戸兒の嫁へ舅は遠慮する 刀三
 千筋を舅今年も着てるなり 同
 消壺のふたをしなほす舅也 かほる
 せんそくがしよい舅を苦しめる 同
 紐附きの扇を舅持てあまし 同
 (佳)誰の手もかけぬ舅の釣道具 松郎
 (佳)裁判をする氣へ舅訪づれる 刀三
 (佳)朝顔に今日も餘念のない舅 馬行
 (佳)留守番を舅ミすれば静か。 同
 (軸)嫁笑ひ乍ら舅の唄をき、 悠々
 胃 病
 電車。降りる。胃病つばを吐き 凡平
 母親の胃病四五日寝る。すみ 聞路

空ゑつき胃病で死ぬと思つて居 悠々
 飯み過ぎの胃病へ女房口が過ぎ 史風
 胃が悪い等茶漬けの音を立て かほる
 玉突屋迄も胃散を持歩き 悟郎
 止月から胃病じなや常着也 二柳子
 宴會で胃病上品らしく見ね 乾坤
 秀才と言はれ胃散を飲んでゐる 同
 あれ以後を一人胃病になや。居 十字路
 胃の悪い事も話しバーで酔ひ 同
 交代のやうに夫婦は胃を害ね 馬行
 胃を病んで今日も思案の膳。 同
 徴兵の年の胃病を淋しがり 刀三
 妹を抱いて胃病は留守をする 同
 杏トを胃病果敢なくはいており 同
 これ位ひ胃病勝手にき。喰ひ 松郎
 胃が悪い姐さん。ち。氣兼して 同
 胃病。いふ診立。頼りなく思ひ 同
 胃病の子繪本ばかりをあてが。 路郎
 遺留品の中の胃散が半分減り 同
 胃病の子ま。子のやうな膳に。 同
 心 配
 未じ人これから先が案じられ 末子

又一つの心配を母に言ひ ちか女
 心配に今日言ふ日の暮れが。 史風
 心配のしごろもごろに電話口 悟郎
 心配がなくてはんく。肥ねて。 聞路
 心配の横に甲斐くしき女房 十字路
 お歸りが遅い心配からかはれ 山月
 心配を他所に師走を留守にする 乾坤
 乗り過ぎてから心配の人でなし 二柳子
 心配がまだま。まらぬはたち代 かほる
 心配へ三十過ぎた顔が寄り 同
 心配は心配として一銚子 悠々
 心配の草鞋を解いて里の親 同
 このごろの父のまじ。案じ出し 路郎
 心配をた。風邪ひきにして。 同
 心配の海をへだて。里があり 松郎
 心配の夫の金齒さびしく見 同
 心配の嫁に轉がるカタン糸 同
 心配にはなれ。むない長火鉢 馬行
 心配に關係のない陽が當り 同
 心配の枕をまたも裏返し 同
 心配は電話を切つてからのこ。 刀三
 お茶菓子を持つて心配戻つて來 同
 心配をするな。言へば手を合せ 同

漫時代の産物 柴谷柴舟

電車、自轉車、腕車、自動車、馬力、牛車、モータサイクル等等等、ミても眩るしい



に説明した。彼女は始めて自分の事だゝ氣づくミサット芝居の熊谷のやうな頭をクルリツミ見せた。藥が刊したか頭が紅い空車を曳いた男が破顔一笑行きました。

中に安全地帯なるものが出来た。

△「君見給へヒゼンを極

いてるレデ

イがらるぜ

○「ちがふ、

くあれは

時計を見せ

つけてゐる

んだよ」

ミ一人が叮嚀

ミ一人が叮嚀

川柳書架 (十二)

柳川 1924 年集

(川柳新星會編纂)

▲本書の内容を知るために其の凡例を轉載して見やう。

一、本句集は一九二四年、日本全土及び遠く海外に於て發行された、川柳雜誌約五十種、並に川柳壇を有する各新聞雜誌掲載の川柳數萬句中、新星會同人の閱讀、討議を経て選出せられたるもの、八百餘句を収録しました。

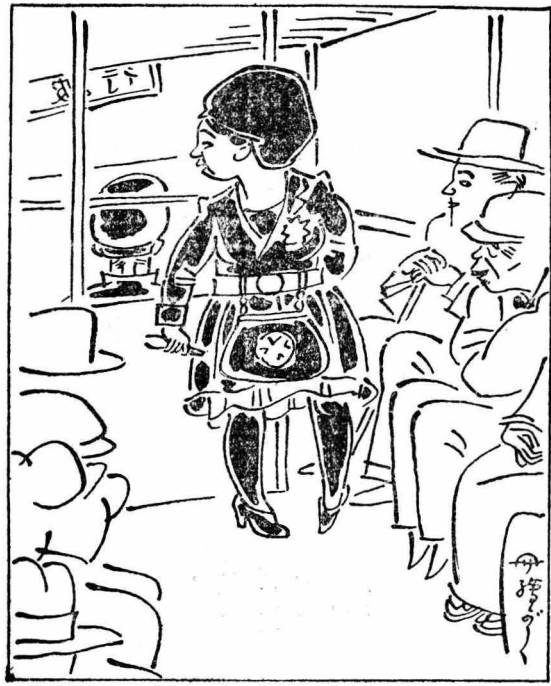
一、本句集は月別に編輯しました、各句の排列は、その發表された雜誌等の發行月に據りました。

一、本句集の編纂に方つては、可及的柳壇の全班を網羅して、代表的佳什の選收到に努めましたが、尙割愛、遺失のなきを保しません。幸に御諒承を願ひます。

▲大正十四年八月二十日發行。四六版一

(B)

「次ーぎ、ストップ」『電車オーライ』平氣でアイハコ言葉ですまして居る乗合ひの女車掌。都いコシマキがチラホラ下から見ゆるのも愛嬌だ。



△「大事なものをも同様に護り得る様にかばんをアソコへ掛けさせたあの考へは、スチキだね」
○「さうかて運轉手この情事が新聞に出したやないか」

△「扇の手かっつのは別さ。眞向正冊からの敵、スナハチお客だネ、其の場合だけの防備さ」
△○「ウハツハ、、、、、、」

事務所偶會

六五頁定價一圓 東京市小石川區大塚坂下町九六川柳新屋會發行。

▲感じのいい句集である。一讀を薦む。

恰度前號の出来た日に事務所へ山月一路の兩君が顔を見せたので發送を手傳つて貰ひ一そのあこで一題作句した(一柳子)
待ちほけへ脱線したと申譯け 山月
待ちほけは來れば叱つてやる。 一路
待ちほけは一へん歸るかと思ひ 同
待ちほけは電車の數も數えたり 二柳子
待ちほけに時計の針の進むこも 同

馬行居偶會

九月八日夜

それつきり池の話は避けたがり 屏三呂
さゞ波に池は生きてる姿也 同
小さい時泳いだ池へ涼みに來露斗
怖れて見れば魔のやうな池 東山子
池で泳いで來たやうな顔もせず 同
釣れる池我家は遠く黄昏れる 蟻蠅子
池の鯉燕の白い腹を見る 同

募

集

句

祭

淺井五葉選

川柳家の戸籍調べ

洋館の半身白う池に見せ馬行
 深いかみ泳ぎたさうに池へ立ち同
 東の間の池に電車がうつるなり同
 金持の庭へ來てゐる池の水同

馬行生

口 係

(一)姓名 (二)雅號 (三)別號 (四)現住所
 (五)生年月日 (六)職業 (七)好きな句 (八)
 好きなタイプの女 (九)自信の句 (一〇)川
 柳以外の趣味 (一一)配偶者の有無 (一二)
 嫌いなもの (一三)川柳に手を染めた年月

(32) 木村半文錢

(一)木村三郎 (二)半文錢 (三)阿羅漢、
 三摩坊、白雲樓、菘村外無數 (四)大阪市
 西成區三日路町六六五番地 (五)明治廿二
 年三月七日 (六)賣文 (七)自分が發見し得
 られなかつた他人の句 (八)いつそ毒が利
 くか平凡か (九)二十句ほきあり (一〇)酒
 より外に何の趣味も見當らず (一一)有
 (一二)宣傳、自己廣告、虚偽、米國式、
 哲學青年、近代的女性 (一三)明治卅八年
 頃、覺。

(33) 高橋かほる

お祭。見す出戻りは瘦せて居る 村句茂

嚴重な足こしらへの神輿かき 柳人

宵祭丁稚も新らの下駄をはき 眠聲

お祭の暮のうちらで碁がはずみ 放馬

お祭りの歸りに眠る兒を脊負ひ 仰天子

やれくま祭のすんだ女親 露斗

お祭の街を真ッ直ぐ出前持 一左

夏祭歸つてからが蟲痴になり 露溪

お祭で知つたもういゝ娘さん 吐露樓

お祭にやれば丁稚の遅いこま 白濁

立 膝

安川久流美選

立膝で遣手なかく承知せず 眠聲

立膝の事の亭主こめめてゐる 蚊十

立膝の女將へ舞妓泣きくづれ 南天樓

立膝が將棋の盤をこりかこみ 渴水

お祭に他所の屏風を見て通り 元山

お祭に帯を大きく結ぶなり 同

レコードを四五枚買ふて來る祭 凡平

魚屋は祭の朝を二人で來 同

お祭に暮しを見せる金屏風 乾坤

飲むだけの様に祭へ叔父が來る 同

白足袋の揃ふ太鼓へ俄雨 萬よし

本署でも祭のもめは軽くすみ 同

お神輿が通りお祭しまひなり 聞路

お祭に花火線香を貰はされる 同

明石までやつぱり祭らしいなり 同

立膝のまゝ小包の紐を解き 仰天子

偶然のやうに立膝猫を追ひ 龍堂

眠られぬらしく立膝蚤をこり 琴月

立膝と揉す火鉢の小抽斗 同

藝者の子もう立膝で化粧する 萬よし
美術展立膝の畫の人だから 同

洗 濯

洗濯の手で郵便を拾ひ上げ 一休
留守番の下女は何なミ洗つこき 黙太
褌股も洗つて呉れる程の仲 愚劣
洗濯をしたが帽子が小さくなり 一路
洗濯に晝寝もせずに律義な妓 突支坊
洗濯を貯めない嫁の心掛け 聞路
明日洗ふつもりで女房ついで 正坊
した事のない洗濯が雨になり 露斗
洗ひ物つくねたまゝでひこ七日 炭車
洗濯をするも母なき姉であり 駒人
洗濯に其日が暮れる母になり 青影子
洗濯も手鍋もこ云ふ身を捧げ 松雨
洗濯の襷を脱つす客が来る 屏三呂
洗濯へ幼稚園から戻つて来し けゆる
洗ひます序でこ襷はすさせる 山月
世話のない洗濯は子の出来ぬ内 竹榮
洗濯 手を拭き乍ら店へ来る 狂華子

(佳)立膝を座り直して飯にする 憲翠
同)風鈴の下で立膝爪を切り 凡平

高橋古城山選

洗濯の襷一日かけてゐる 蚊十
洗濯の手に印袴纏の色 默人
洗ぎする老いたる母に皺が殖へ 南天棒
又泣いてゐるなミ洗濯手を止め 眠聲
襪襪乾す此物干を嬉しがり 萬よし
洗濯を濟まして晝がちこ遅れ 同
女房の氣苦勞洗濯たまつてる 山美
また着れる物をこ下女は洗濯し 同
物干に子供のネルが濡れてゐる 濁水
水道の盟に躍る赤い足袋 同
洗濯をしてゐるここへ久し振り 琴月
洗濯のここまで愚痴が聞こえて来 同
洗濯に井戸水の色變つて来 凡平
道問へば洗濯若い聲を出し 同
洗濯に今日の天氣が物足らず 元山
洗濯を妾はしてぬ様に見せ 同
洗濯の母を困らす赤インキ 吐霞樓

(一)高橋正夫(二)かほる(三)忠正(繪の先生より戴きし名)花丸、美禰子、ややほん(四)大阪市南區北旅屋町二〇一市電北堀江停留所下車、ちこ遊びに(五)明治三十一年十二月十八日生れしこやら(六)無職(七)さうしても古句が好き(八)其日く風の次第にて定まらず(九)活字になつて現はれる迄の句(一〇)エライヤツチャク、芝居及び芝居の物真似但女形、落語の二階ぞめき、舞臺模型、繪、小人形、三味線、なんし陽氣な事が好き(一一)有ります(一二)汽車の笛と鐵砲の音、洋食(一三)おもやの初午の地口行燈に書きましたのが皮切りで時代は一寸思ひ出せよ。

(34) 小林義矢満

(一)小林芳雄(二)義矢満(三)杉桑樓(四)大阪市港區市岡町元町通二丁目四二(五)明治廿一年十一月五日生(六)機械工(七)たんとある中の一句は力好氏の辻ビラをかむつて見てゐる閑な奴(八)面長で中肉中背表情に少し遊秋らしい淋し味の漂ふ女、勿論顔の造作は水平線以上を好むのだからです。性格としては句向「いゝ女帯を

洗濯の敷布も旅の氣分なり 同
 洗濯を干し乍ら見降ろす隣 同
 (佳) 竿があつたら洗たい日和 凡平
 (佳) 洗濯へ今うちの人起きたこ 眠聲

夏 服

雅 幽 選

窓際へ立つて夏服脱いて居る 山月
 夏服の逡巡も暑さ同じ事 柳人
 夏服の月賦がすむともう破れ 村句茂
 夏休み兄は瀟洒な服で来る 乾坤
 ソーダ水今日新調の服を知り 眠聲
 夏服へ此のネクタイが似合ひな 露斗
 白服に日焼けの顔が目立つ事 隨帖
 夏服で出てお歸りが遅くなり 一左
 夏服で外交員ミ云ふ程度 龍堂
 御氣性は折目に見ゆる麻ヅボン 南汀
 茂りから不意に夏服顔を出し 元山
 夏服の夫を若く見る朝 凡平
 夏服の揃ひ水兵上陸し 辰進子

太 關 本 雅 幽 共 選
 田 田 一 聲

(佳) そんなもんなら風呂で洗よ 鳶歩
 (佳) 洗濯へ見兼ね妻の腹はら成り 乾坤
 (軸) 晝寝するつもり張板反ひ出 古城山
 汗ふきながら夏服尋ねて來 蚊十
 夏服の暗夜に見わた二三人 笑郎
 夏服の汚れるばかり儲からず 炭車
 夏服をちみきうくつな集あ人 一路
 夏服へすこしこほしたイチゴ水 同
 夏服の折目正して朝を待ち 聞路
 夏服の社長へ風がよく通り 同
 太陽にうごめつて居る白い服 逸鏡
 アルパカのよれにもひひ生活苦 同
 夏服の針金程の膝のひけ 吐露樓
 呼鈴に夏服着ねばならぬ用 同
 夏服で來ても船長飲める事 萬よし
 將軍が膏廣で來てる避暑の宿 同
 夏服に不動貯蓄の大砲 同

つくねて留守になり「底の眞面目の中に
 變轉滑脱、臨機應變の才ある女、亭主の
 前で亭主が妬く程亭主の友達を厚遇する
 女(九)折角御勉強中(一〇)取入れたいは
 かりで時とき金かに恵まれず(一一)水平線
 以下のが有りは有り(一二)頭辛のズイキ
 ぶる女、ブルドッグの面體、(一三)大正
 九年夏頃大毎柳壇の課か債せ券へ斯うも
 あらうかこ踏出したのが病付き。

(35) 金川佳鳴

(一)金川龜次(二)佳鳴(三)こりこめた號
 なし(四)堺市遠里小野町三七七ノ一向陽
 寮(五)明治三十年三月十八日生(六)製藥
 工手(七)され共書けまへん(八)自分が瘦
 せてゐる故か肉附のよい但し太りすぎぬ
 顔の丸味愛嬌のある女(九)お恥し乍らお
 まへん(一〇)案外無趣味な男(一一)昔あ
 つたが今はおまへん(一二)なし(一三)大
 正十二年の暮頃。

(36) 勝間長人

(一)勝間善吉(二)長人(三)長幸、外いろ
 く(四)大阪市港區三軒家町三丁目五四
 (五)明治三十三年十月廿五日(六)マシ
 ニスト(七)菴あま調の句が皆好きです(八)
 淋しい涙もろい女が好きです、爪弾きで

(佳)生活へ軽い氣もする夏の服 乾坤

(佳)終電車アルバカ一人涼し過す 小松

(佳)夏服を脱いで逦査の家家^な 万よし

(佳)社長のご餘り變らぬ夏の服 同

(軸)夏服の手輕な旅を覺^ひたり 雅幽

◇ 一 聲 選

夏服へちこ色黒いのが目立ち 一路

汗をふき乍ら夏服尋ねて來 蚊十

夏服からはち切れさうな曲線美 笑郎

夏服の折目正しく朝を待ち 聞路

夏服へ運轉臺のきつい風 山月

新調の夏服を着てらごおごり 柳人

夏服の月賦が濟むさもう破れ 村句茂

日盛りの中を夏服草臥れる 乾坤

夏服へ女房の火慰斗ちこ熱し 凡平

二年生白服へ又墨が散り濁水

夏服になつて人間あらを出し 仰天子

夏服で故郷へ走る汽車の客露斗

夏服の汚れたまんま秋になり 隨帖

夏服の驚いて退く撒水車龍堂

夏服の此の阪道で汗になり 吐露樓

夏服のハイカラ丈に念が入り 南天棒

夕立に夏服軒でしほれて居 白濁

白服へはね飛ばされた怒りやう 清春

夏服の寫眞の鞆がよく目立ち 光郎

夏服に旅行鞆の大きすぎ 太閣

夏服に瘦をみせてる外交員 炭車

いゝ天氣白い夏服照り返し 同

籐椅子へ夏服別な氣で座り 元山

事務を取る間夏服脱いだまゝ 同

(佳)紹介所這入る夏服悲哀なり 炭車

(佳)警察のズボンへ早い夏來^あ 乾坤

(佳)夏服で一層瘦せた人にされ 凡平

(佳)夏服へ今日の埃の目立つ事 露斗

(人)夏服へ去年のはねが^ま残り 眠聲

(地)夏服のい^ま苦戰氣な下手飛車 龍堂

(天)夏服を浴衣に^て瀧へ來る 萬よし

(軸)夏服の色様々の歌劇團 一聲

満員車夏服暑い事を知り 同

一人泣いてるやうな女(九)未だ出來ません(一〇)運動競技全部です(一一)なし(一二)別に嫌ひさいふ物はありません(一三)大正九年七月二十四日番傘例會へ出たのが始めらしいです。

(37) 久世 一路

(一)久世槽三郎(二)一路(三)柳翠(四)大阪市港區北福崎西ノ町四(五)明治三十四年九月廿八日生(六)會社員(七)爛番で酒屋は伊勢へ二度まるり(路郎氏)亂射亂撃撥の手の忙しい女(九)目下努力中です(十)氣立の優しい女(九)目下努力中です(十)筑前琵琶、カメラ、芝居、映畫(一一)ありません(十二)不清潔、煙草、貝類、蟹(十三)大正十一年一月頃から始めました

新戎橋より

自分の身體中が自分^{じぶん}に反抗^{はんかう}することがある、肉體も、希望も、信仰も、川柳味さへも。さうかと思ふに自分の身體中^{じぶん}が自分^{じぶん}に味方^{みかた}することがある、失敗も、弱點も、無智も、病氣^{びやうき}でさへも。

(万よし生)



字 埋

許嫁と櫻咲く

(下)

人 主 莊 日 遅

(前項のつゞき) 右の外、句意不明瞭の句や、字足らず、字餘りのため句の體をなきぬものは此處には掲げぬことにした。
そこで原句はどんな句か云へば、許嫁の男が女に對する態度を詠んだ

許嫁藏へしまはぬ計り也

さいふのである。これは武玉川にある句だ。應募者は自分の句を三つ選つてゐるか、又その點まで似かよつてゐるかさいふを研究されるのも面白からうと思ふ。

應募句の殆んどすべてが、かなりまじまつてゐた。これは制限された辭句を埋めやうとして、勢ひ句を練つた結果に外ならない。この點から見て埋め字を募つたことは全然無意義ではない。

かつた。

後者の

つまる所○○○○○○○○櫻咲く

は前者の『許嫁○○○○○○計り也』よりも難かしかつた。見えて應募句が大分少かつた。

なかには『つまる所』の意味を取り違へてゐる人さへもあつた。『つまる所』は道が行まつたさいふ意味ではなくて『結局』さいふ意味である。

道が行まつまるさか、突當りさかいふ意味に間違つて解釋してはるないが『つまる所』さいふ意味がピンと來ない、つまり適切に當嵌まつてゐない句を送つて來た人も相當にあつた。

原句は前同様武玉川にある

つまる所酒屋がための櫻咲く

であるが、原句を凌ぐやうな句は一句も見當らなかつた。

これで、この句に動かすことの出來ない強さがある譯である。句の生命は其處にある。

酒に縁のある

つまる所酒を飲ませに櫻咲く

△△△呑む話なり△△△

の二句も原句には及ばなかつた。次に

逆 鬼
十字路

つまる所例年同じ櫻咲く
 △△△△年一度は△△△
 の三句は全く同想である。理屈ッほくて句ミしての體をなして
 るるに過ぎぬ。

同じく季節を詠んだ句でも

つまる所春のしるしに櫻咲く 馬行
 ミ云へばやもうるほひがある。

つまる所さうにか越せば櫻咲く 村句茂

「さうにか越せば」は六三十日のことを云つたものであるから、
 季節を詠んだ句ミしては随分長い時間の句である。

年の瀬をさうにか越したかと思へばもう櫻が咲いてゐる、あ
 お月日の經つのは早いものだなア云ふころか。

つまる所又無心なり櫻咲く 十字路
 △△△△エ、だしになる△△△ 好夢

は共に櫻をだしに使つた句である。次に芝居を詠んだ句では

つまる所大詰になる櫻咲く 好夢
 つまる所果の舞臺に櫻咲く 炭車

の二句があつたが後者は「つまる所」が利いてゐない。

つまる所俺だけ馘首で櫻咲く 馬行
 △△△△浪々の身へ△△△
 の二句は華やかな櫻の咲くにつけても現在の自分の生活はあま
 りに無氣力であつて、これから前途の事を思へばなんだか厭な
 氣持ちが襲つて来る。共に人生の暗い方面の觀察である。

つまる所生きてゐるたまへ櫻咲く 馬行
 △△△△愉快に住め△△△
 なごみ舉げることが出来る。

右に示したやうな句から全く趣の違つた句ミしては
 つまる所瀟瀟にさる櫻咲く 好夢
 △△△△△繪葉書通り△△△ 放馬

の二句であらう。
 前者は櫻の用途を詠んでゐるし、後者は櫻の咲いた状態を他
 のものをかりて説明してゐる。

理の字の應募句を繰返して讀んで見るミ、矢張り多年作句に親
 しんでゐる人達の方に佳句が多かつたこの點から見ても理の字
 ミいふ事は別として常に句を練る必要があらうと思ふ。(終)

粒々集

生活のま
 石南茶妻に容ありついでみる 蛭子省二
 朝顔をもちやそびに來た子の葬式
 一つの朝鮮鶏が馴れて呉れず
 別府温泉より虫を取り寄せる
 クツワ虫二百十日の書に鳴き

句帳り

ステツキをのばして小川渡して居 柴谷柴舟
 あの星があの枝へ來るまでネイトで、
 抱きしめるにはあまり小さき葉なり、
 子が出來て立つウインドが變つて來
 送られた話先の人ミは思はれず



川柳塔

○ 吉川 啞人

さも不思議さうに猫の子身構へる
母妾も不景氣らしい頭痛膏
材木屋一本抜くに置き替はる
踏み付けた糊から怒るまいこまか
カステラがこほれ行儀を教はられ
井は邪魔臭かつた證據なり
腹の子にロケーションをば休むなり
カナリヤへちみ氣を向ける小間物屋
おもろない講義鉛筆けづるなり

○ 塚崎 松郎

宿替の夫婦駈落する姿
親類の子に賑やかな膳となり
無月給なればみつくなぐつてる
惚れ合ふた仲は見えぬ大掃除
物干の風肩當てをふくらませ
新妻の名前をふつと忘れる日
姉娘顔にも出さず惚れてゐる
諦めて元の次男となりけり
結界へ戻れば燐寸こはれてる

貴族仲間に流行る早起
安らかな夫の寝顔に涙が出
年寄りに話を合はせ恙なし

○ 井上 刀三

戀を知る頃は菜種へ話しかけ
他所の子は他所の子にして涙ぐみ
繼母に白粉を買ふ金があり
諦めてゐるかのやうに眠つて居
思ひ出は母のまつけの黒かりき
尼になる人を哀れに思ひ居し
母あさんをなぶるお氣かと言はれて居

○ 森田 輝 翠

群集を子供頭で割つて抜け
經驗で來るのを息子理論に出
門付の今日は素氣なく断られ
自働車で歸つて妻を驚かせ
修身科みんなが膝に手を重ね
こゝからの坂を草鞋に履き替へる

○ 林田 馬 行

御無沙汰の昔變らぬ高笑ひ
赤瓦主じ洋行中さあり
資本家が來たぜさ又もおごらされ
二つ目の帽子に暑さまだ去らず
人妻さして見送りの中にある
御近所に素氣なう露路に圍はれて
臨終の次の間瓦斯の明るすぎ
物云はぬ父戴いて子澤山
夏服の白い氣持も二三日
費はねば損するやうに飛び歩き
ネクタイを結ぶ手付きも秋になり
金々みつぶやく一人横になり
叱られる迄も締めてる赤い帯

○ 黒木 莢 豆

競争の相手さ知らず世話を受け
氣のせまい男上手にけなすなり
妹の心づかひの嘘もみへ
友人に逢ひたい三十九度一分
みなし子は笛になりたい夢をみる

さみしさは柿のへたから蠅が逃げ
たいていの事は忘れる契瓶

○ 高橋 かほる

光秀が小ひさう見わる半廻し
竹籤が一本倒ける半廻し
半廻し紙治の姿いぢらしく
辻うらが出さうに思ふもなか也

○ 岩崎 柳路

常盤津のおさらねもよし候爵家
軍隊で靴の修繕まで覺ぬ
若旦那ほまれを吸ふて星二つ
丁稚もう簡易保険が嫌になり
踊つてるやうに雀の屋根傳ひ
乳の下へ娘きつちり帯を締め

○ 庄 萬よし

電話でもよいにご母は嬉しさう
間違ひは貸し手を信じすぎた事
青い葉がある間朝顔捨てもせず

○ 麻生 葎乃

こほろぎよ私も蚊張で起きてゐる
燈籠ながしかも白蚊帳のゆれ
さながら母の慈愛も捨てがたし
露を呑むでるたし松虫の様に
小蟹くお母さんの穴へ行け
めかす氣もなく一本の名古屋帶
糠味噌をあびてこほろぎ柿が出る

○ 宮内 一州

氷襖は眞つ直ぐに垂れ頼まれる

○ 二木 幸堂

こほろぎを聞きく裕縫ふてゐる

○ 太田 一聲

秋になつて團扇箆筒の間へ落ち
來客に嫁エブロンで手を拭ひ
菊形人ごつち向いても厚化粧
菊人形あつご思つた人違ひ

○ 橋本 二柳子

呑みすぎた朝仕事着は黙つて居
無雑作に寝てゐる姿なややつ
電燈を下けて内職はかきらす

逢 状

塚 崎 松 郎

不意な儲けがある。彼はすぐ遊廊。いふものが頭に浮び上る。そしていつしか彼の足はさう云つた方面へ向いた。

女將がさし出した茶に軽く會釋をして「忙がしいですか」さか「お梅さん（少婢のこゝ）が見ぬぬがさうしたのですかさか「〇〇君は來ますか」なご、聞いてみたりして、眞面目をよそほひ乍ら、自分分は遊びに來たのではないやうな表情を向けるのが彼の常であつた。二階の用事をすまして降りて來たお梅を呼付けた女將が逢狀をさら／＼三四五枚書いて、

「すぐ貰ひくくなはれテ、はよ行て來て」さいひ付けるのを、彼は何んだか居たまらぬやうな落付きのない氣持で、いつしか手にした明き書へ讀むごもなしに目を落してゐた。

「いますぐ來やはりまつさかいさ、ぞお

上りやす」

さ女將の笑ましい愛相に、

「ぢや一寸上らして貰をか」

さいふのも半分口の中に彼は逃げるやうに二階の座敷へ上つて行つた。

表座敷の六疊の床には、いつもの南水の小品が掛けられてあつて、置物に並んだ花瓶にはいつにない猫柳がへちて活けられてあつた。掛額、歌麿の濃艶な筆致に向つてほんやり立すくんだ彼は、

「お着替へやしたらさうでんの」

さ無性箱や、さつき彼が脱ぎ捨てゝおいた帽子を持つて上つて來た仲居の聲に

「これで結構」

さ振向きもしないで、歌麿の繪に何かこうむづかしく鑑賞でもしてゐるやうに見せかけてゐた。彼の後姿へ、

「さうおつしやらん、今日は忍らうむ

し暑おまつしやらう」さ月並な言葉を残して出て行く仲居さ入違ひに

「お越しやす」

さ這入つて來た逢狀の一人。赤箱の匂ひをさせながら「何見てはりまんの」さ彼の側へ寄つて來たのへ、

「やあ君か」

さその方へ向いた彼は、袂のハンカチを出して脂手を拭き／＼座ぶさんへさつかり坐つた。彼の眼には矢張り美しい髪、白粉の匂ひ軽やかな衣すれ、がせまつて來た彼はもう家の事も、友人のこゝも何もかも忘れてしまつてゐた。

そこへまた一人「今晚は」さ闕に手をついた妓のまつしろな襟あし。

お鏡子が選ばれる、突出しが出る。仲居が座をしめる。盃は廻された。

「おかあちゃんおほけに來てはりまんの おごりまつさ」

さかん高い中にもすゞしい聲が階下に聞けた。さその聲を耳にした彼は急に胸のおさるのを覺れた。



編 輯 後 記

△燈下親むべき秋も、や眼の前へ來ました。秋云ふ言葉を聞くこほんこに救はれた氣持になります。名句の生れるのもこの秋だ云ふ感じがいたします。讀者の諸兄御健在ですか。九月の月は例會に小集にそれはく忙しい月でした。川柳は追々盛んになつて行く云ふ感を深うします。

△それにしても我々は熱こりを以てすん／＼川柳の道押し開いて行かなければなりません。同人が寄り合ふては川柳の

將來さか日本柳壇の今後さかいろんな論題の下に氣焔をあけてゐます。ほんこに僕等は今腕が鳴つてゐるのです。

新進作家は月を追ふて増加して來ます。新しい人々も眼さましく輩出して來ました。

各地の川柳家諸兄繁禪一番川柳のために御奮闘の程町つておきます

△大連より歸京の途、來阪された井上劍花坊氏の歡迎會は豪雨にも拘らず盛會でありました。

劍花氏の來阪を機會に舊同人の吉川啞人氏同人さして復活されました。

△病氣靜養中であつた竹田蘆穂氏も健康舊に復しましたので同人に復活されました。

△本號に武笠山椒氏の本事川柳が久し振りに出ました。御愛讀を願ひます尙引續き御寄稿下さるさうです。

△來月は少し氣の利いた句會が吟行でもやりたいと思つてゐます定まりましたら案内いたします。舉つて御参加下さらん

事を今から希望しておきます

△太田一聲氏は嵐山高野山へ遊び廻つて來ました。

△九月十八日に端の坊で柳翁忌を営みました。

句稿は記事編輯のために止むなく次號で發表することにいたしました。

△前號校正日の八月二十八日に久良崎社同人の佐伯高岳氏が來社されました。

△同人宮内一三氏は又々御病臥の由御全快の程を祈ります△堀内わたる氏は今回靜室を改號されました。

△前號一九頁一妾見を別に男衆汗を拭きひろし」は妾見を前に」の誤りに付訂正

轉 居

△井上刀三（大阪市北區老松町一丁目一七畷田方）

△塚論松郎（同）

△黒木英豆（阪神沿線今津池田寫真館）

△加古しげ（東京市京橋區南八丁堀一）

一 佐藤喜十郎方）

△葉多默太（大阪府豐能郡北豐島村字野）

△藤原正坊（神戸神若連三丁目五八延原方）

△鹽津秀甫（此花區西九條下通二丁目五番地岸田金吾方）

▲道頓堀川にかゝつた日本橋を南へ渡つて牛丁も行かないところにある古本屋です
▲主人公藤堂氏は愉快なおぢさんです。とても古本屋のおぢさんとしては珍らしい人です。

▲古本を漁りながらいろんな話をしてあげ道頓堀を歩いて来た感じが流れるやうに出て來ます。

▲この特色としては、どんな本でも蒐めてあること、値段のところはまかしておいても安心して買へること云ふこと買ふさか買はぬさか云ふことを問題にせず愉快に本を見られるさいふことです。

▲せいぜい主人公とお馴染になつて下さい。探して貰ひたい本があれば頼んでおきさへすれば出来るだけ便宜を興へて貰へます(路郎生)

古

本

高價に申し受けます。

御通知次第早速參上確實

迅速に御取引致します。

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入

電話南 五 六 二 番

投稿規定

- ▼句稿は別紙に認め、住所氏名を明記するこゝ。
- ▼書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」と封筒に朱記するこゝ。
- ▼締切は厳守されたし。
- ▼各地會報は清記のこゝ。
- ▼川紙は半紙又は同型の野紙に限る。
- ▼投稿其他につき御問合はすべて返信料封入のこゝ。

募集

第二卷第十二號課題

十月十五日締切
(各題二十句以内)

- ▼襟 垢 相元 紋太選
- ▼小 屋 吉本 寬汀選
- ▼肌 塚崎 松郎 共選
橋本 二柳子

第三卷第一號課題

十一月十日締切
(各題二十句以内)

- ▼太陽 井上 劍花 坊選
- ▼夫人 塚崎 松郎 選
- ▼紋付 岩崎 柳路 共選
森田 輝翠

每號募集

- ▼近作柳傳(五十句以内) 麻生路郎選
- ▼各地柳壇(會報) 編輯局選
- ▼文章(評論研究吟行漫文)

社告

社務一切(編輯に関する件、投句、購讀廣告)の用件は下記川柳雜誌社事務所に宛に願ひます

價定

- 一部 參拾錢郵
- 六部 壹圓六拾錢稅郵
- 十二部 參圓(共)

廣告

本誌の廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいませれば御相談に應じます。

▼御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直ちに御送金を願ひます▼柳希望により集金郵便を差立てますが御不在中でも頂ける様に願ひます、但集金郵便(一年分)には定價の外に手数料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に関する御用件は箇人宛にしない事

大正十四年九月廿五日印刷

大正十四年十月一日發行

第二卷第十號
(毎月一回一日發行)

編輯兼發行印刷人 麻生 幸 一郎
兵庫縣武庫郡鳴尾村字寺ノ後四四番地
發行所 川柳雜誌社
兵庫縣武庫郡鳴尾村字寺ノ後四四番地
振替大阪三一五一四番

川柳雜誌社事務所

大阪市港區八條通二丁目十一番地
振替大阪七五〇五〇番

店書捌賣
(大阪) 明文堂 公立社 柳屋
(東京) 東條 (京都) 三宅 (神戸) 米田
(金澤) 石井 (松任) 三須 (函館) 石森

川柳雜誌社同人（いろは順）

主幹 麻生路郎

關本雅幽	庄萬よし	佐々木黙闇	駒井美の作	矢田右大臣	塚崎松郎	竹田蘆穂	高橋古城山	龜井花童子	太田一聲	吉川啞人	西垣松雨	橋本二柳子	原史風	岩崎柳路
		森田輝翠	宮内一洲	柳川洲馬	黒木莢豆	竹内多聞	高見柳骨（入營中）	高橋かほる	河南放馬	太田徹底郎	徳田双柳	二木幸堂	林田馬行	井上刀三

第一支部

大阪市南區新戎橋南詰

幹事 庄萬よし

第二支部

大阪市北區南同心町二丁目四五〇

幹事 原史風

第三支部

岸和田市下野町四一九

幹事 太田一聲

第四支部

大阪市港區鶴町四丁目一九九

幹事 關本雅幽

第五支部

大阪市東區餌差町二二一番地

幹事 駒井美の作

第六支部

兵庫縣武庫郡六甲苦樂園

幹事 佐々木黙闇

第七支部

大阪市東澁川區南濱町一八二

幹事 西垣松雨

第八支部

神戸市上中島町二丁目四二

幹事 宮内一洲

第九支部

山口縣山口町石原小路

幹事 柳川洲馬

第十支部

大阪市外豐中榮通二丁目石賀方

幹事 林田馬行

第十一支部

東京芝區愛宕町一ノ一六大成社内

幹事 岩崎柳路

第十二支部

函館市青柳町五〇

幹事 龜井花童子

第十三支部

大阪市住吉區安立町五丁目二二

幹事 徳田双柳

第十四支部

朝鮮仁川仲町三丁目八

幹事 矢田右大臣

糖尿病新藥

インスマリチン Insmellitin

本劑

は本研究所創製にかゝる二種の獨立特效藥（各種糖尿症に對し）パホミン「藤藤抽出物」ミヤタロン「五加科植物抽出物」を主藥とする錠劑なり

特色

パホミンは簡單なる徑口的攝取により安全に血糖及尿糖を容易に〇、二以下に降下せしめ得、ヤタロンは器質的病變に及ぼす根本的恢復整調作用を司る

◇日常の生活に拘束を加へず◇ 副作用絶無

適應症

各種糖尿病、腎臟病兼糖尿病、結核兼糖尿病、糖尿症に起因する口渴、饑餓感、痒、癆、常便溺、不眠症

包裝

インスマリチン錠 九〇錠入 一三四十五日分 一八〇錠入 二五圓（廿日分）

醫科專用

Pahomin + Yalalon = Insmellitin

Pahominpul. 25gr. 50gr. } の御注文は發賣元へ乞ふ
Yalalonpul. 50gr. 100gr. }

發賣元 大阪市東區仁右衛門町二八八

製藥所 大阪市東區仁右衛門町二八八

（概説實驗及抄録進呈）

一 特約店

東京 銀座 松屋吳服店新藥部
大阪 長堀橋 高嶋屋吳服店新藥部
名古屋 中區 松坂屋新藥部

熊谷英商店

熊谷糖尿病腎臟病研究所

電話東三五一四 振替大阪七一〇一三